

個別最適な学びと協働的な学びとは

－令和3年1月中央教育審議会答申より－

足利大学 教職課程センター長 教授 池守 滋

1. はじめに

中央教育審議会は、令和3年1月26日、『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～』を文部科学大臣へ答申した。新しい学習指導要領が令和2年4月より小学校に適用され、年次進行で中学校、高等学校へ進む中、本答申では、これからの新しい令和の学校教育として、幼児教育の質の向上、義務教育として一環した小学校・中学校の教育の在り方、義務教育における原級留置、新時代に対応した高校普通科の新しい学科、特別支援教育や外国人児童生徒への教育の在り方、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う遠隔・オンライン教育などのICTの活用、学びを支える環境整備、児童生徒の減少による学校規模の縮小を踏まえた学校運営や施設の在り方、さらに教師や教職員組織の在り方などを多岐にわたって提言した。答申全体については、文部科学省のHPで確認願いたい。ここでは、副題に示された「個別最適な学びと協働的な学び」とは、どのようなものかについて述べる。

2. 個に応じた指導

これまでの学習指導要領において「個に応じた指導」に関しては、昭和33年に「個人差に留意して指導し、それぞれの児童（生徒）の個性や能力をできるだけ伸ばすようにすること」が最初に示された。さらに、平成元年には、個人の特性に応じた教育方法によって、指導できるよう改善を図る「個に応じた指導」が掲げられ、平成10年以降は、その一層の充実を図る観点から、そのための指導方法等の例示が明記された。

令和4年度から適用となる新しい高等学校学習指導要領（以後、新学習指導要領とする）の基となる平成28年の中央教育審議会の答申では、子供一人一人の興味や関心、発達や学習の課題等を踏まえ、それぞれの個性に応じた学びを引き出し、一人一人の資質・能力を高めていくことが重要であり、各学校が行う進路指導や生徒指導、学習指導等についても、子供たち一人一人の発達を支え、資質・能力を育成するという観点からその意義を捉え直し、充実を図っていくことが必要であると提言している。さらに、「個に応じた指導」を一層重視する必要があるとされた。これを受け、新学習指導要領では、次の通り示された。

高等学校学習指導要領

第1章総則第5款1

(5)生徒が、基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め、学習内容を確実に身に付けることができるよう、生徒や学校の実態に応じ、個別学習やグループ別学習、繰り返し学習、学習内容の習熟の程度に応じた学習、生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや、教師間の協力による指導体制を確保することなど、指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。(下線は著者が加筆。以下略)

高等学校では、生徒の特性や進路が多様化しており、生徒一人一人を尊重し、個性を生かす教育の充実を図るためには、教師と学校が指導方法や指導体制を工夫改善し、「個に応じた指導」の充実を図らなくてはならない。「個に応じた指導」のための指導方法や指導体制は、生徒や学校の実態などに応じて、学校が一体となって工夫改善を進める必要がある。特に、指導体制の充実には、学習指導ばかりでなく生徒指導も含め、学校全体として共通理解の下に全ての教職員が協力していかななくてはならない。

なお、その際、各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するための環境を整え、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることについても新学習指導要領では明示された。現在、GIGAスクール構想により小中学校ではICT環境が急速に整備されており、今後は高等学校にも整備されることであろう。この新たなICT環境を活用した一人一人に応じたきめ細かな指導体制での「個に応じた指導」が進むことが期待されている。

3. 個別最適な学びとは

「個に応じた指導」では、「指導の個別化」と「学習の個性化」という二つが大切である。

「指導の個別化」とは、全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等(学力の3要素)を育成するために、教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことである。つまり、全ての子供に共通の学力を等しく保障するため、教師が子供一人一人に個別に最適な指導方法、学習時間、教材等を柔軟に提供することである。

「学習の個性化」とは、基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究における課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整することである。つまり、全ての子供が共通に身に付けた基礎学力を基にして、個性の伸長やキャリア形成を促すとともに、自分自身で学習を最適なものになるよう調整できることを目指し、各自の得意分野やこだわりを持つ領域などの学びに十分に取り組める機会を教師が提供することである。

以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり、この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」で

ある。しかし、「個別最適な学び」という考え方は、特に新しいものではなく、すでに多くの学校で実践されているものである。ところが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に対応するため、学校における一人一台パソコンが急速に実現することにより、多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるのか、という点が改めて焦点化された。そのため、これからの学校教育においては、子供がICTを日常的に道具として活用することにより、自ら見通しを立てたり、学習の状況を把握し、新たな学習方法を見いだしたり、自ら学び直しや発展的な学習を行いやすくなったりする等、自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう、「個に応じた指導」を充実することが必要であるとされた。

4. 協働的な学びとは

「協働的な学び」とは、先に述べた「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、これまでの「日本型学校教育」において重視されてきた、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成することである。

「協働的な学び」においては、集団の中で個が埋没してしまうことがないよう、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、子供一人一人の良い点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、より良い学びを生み出していくようにすることが大切である。例えば、優れた一斉授業は集団の中での個人に着目した指導や、生徒同士の学び合い、多様な他者とともに問題の発見や解決に挑む授業展開などを内包するものであり、このような視点から授業改

善を図っていくことが期待される。教師として、個々の生徒の特性等も踏まえた上で、「協働的な学び」が充実するようきめ細かな工夫を行うことが重要である。

今、日本の学校教育がこれまで大切にしてきた、同じ空間で時間をともにすることで、お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性が改めて認識されている。これからのAI技術が高度に発達・普及する Society 5.0 が進む令和の時代では、人間同士のリアルな関係づくりが社会を形成していくうえで不可欠であり、知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供の関わり合いや子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での多様な体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が、一層高まっている。「協働的な学び」は、同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや他の学校の子供たちとの学び合いなども含むものである。遠隔授業のための一人一台パソコンの実現により、子供一人一人が自分のペースを大事にしながら共同で作成・編集等を行う活動や、多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動などを通じた「協働的な学び」を発展させることができる。さらに、ICTを利用して空間的・時間的制約を緩和することによって、遠隔地の専門家とつないだ授業や他の学校・地域や海外との交流など、今までできなかった学習活動も可能となることから、その新たな可能性を「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かしていくことが求められる。また、知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」の良さを生かし、学校行事や生徒会活動等を含め学校における様々な活動の中で異学年間の交流の機会を充実することで、生徒が自らのこれまでの成長を振り返り、将来への展望を培うとともに、自己肯定感を育むなどの取組も大切である。

5. 令和の教師への期待

学校における授業づくりに当たっては、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素が組み合わさって実現されていくことが多いと考えられる。各学校においては、教科・科目等の特質に応じ、地域・学校や生徒の実情を踏まえながら、授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし、さらにその成果を「個別最適な学び」に還元するなど、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していくことが必要である。これを通じ、子供一人一人にとっても、学級などの学習集団全体にとっても、より良い学びの実現が期待される。

これからの学校においては、子供が「個別最適な学び」を進められるよう、教師が専門職としての知見を活用し、子供の実態に応じて、学習内容の確実な定着を図る観点や、その理解を

深め、広げる学習を充実させる観点から、カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図ることが求められる。また、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことも求められる。さらに、教師は技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生活の全体を通して探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す役割が求められている。その際、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えなければならない。新しい令和の時代に対応した教師を期待したい。

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

① 個別最適な学び（「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念）

- ◆ 新学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えることが示されており、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることが必要
- ◆ GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境の活用、少人数によるきめ細かな指導体制の整備を進め、「個に応じた指導」を充実していくことが重要
- ◆ その際、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開し、個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育む

指導の個別化

- 基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、
・支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現
・特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う

学習の個性化

- 基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する

- ◆ 「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる
- ◆ その際、ICTの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を利活用することや、教師の負担を軽減することが重要

それぞれの学びを一体的に充実し 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる

② 協働的な学び

- ◆ 「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要
- ◆ 集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせられ、よりよい学びを生み出す

- 知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通して学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まる
- 同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切